痴漢されそうになっている

S級美少女を助けたら隣の席の幼馴染だった

ケンノジ

Illustration フライ

特別書き下ろし短編　第３話

GA文庫

３　兄妹ウォーズ

「ねえ、にーに」

リビングのソファで携帯をイジっていると、妹の茉菜（まな）が声をかけてきた。

「んー？」

画面から顔を上げないまま返事をすると、ぱっと携帯を取り上げられた。

「あ、ちょっと何すんー」

「あたしに、言うこと、ない？」

ニコニコと茉菜は笑っている。
わざわざこんなことを言うときは、俺が何かやらかしたときに限る。
けど、覚えがねえ。
「言うこと、あるっしょ？　笑顔だけど、これ、めっちゃキレてる……。
「言うこと……は、ないです」
「あるの！　ないわけないっしょ！」
「うわぁ、す、すみません！」
「あたしは謝ってほしいわけじゃないの」
「じゃあどうしろと」
俺が何かやらかしたのは確定っぽいから、謝る以外の

選択肢があるんなら教えてほしいところだ。

「何もわかってないくせに、いるのもムカつく」

「ま、待て。落ち着け。俺が謝ればそれでいいと思って った。それに関しては、正直何かやらかしたのは、わか がこんなにキレ散らかすってことは、俺がやべえことを やった。ああ、きっとそうだ。だから、申し訳ないと思 って……」

で、俺は何をやらかしたんだ？

「冷蔵庫のプリン、勝手に食べたっしょ」

そんだけかよ。

「今、そんだけかよ、って言いたそうな顔した！」

「してねえ」

「何でヒトのモン勝手に食べておいて呆れているワケ？　反省の色もないの？　にーに」

「は」

何で俺、妹に理詰めの説教されてるんだよ……。

「あれがおまえの分とは知らなくて……」

「三つで一パックのあれ、マとあたしとにーにで一個ずつって話をしたのに。二個おかしいって思わなかったの？　呆れるー。ほんと」

「悪かった。ごめんって」

「次やったら、鍵かけるから。冷蔵庫に」

冷たい目をした妹に叱られた。

兄の威厳とか、そんなものはずいぶん前からない気が

する。今日はこの程度で納まってよかった、と俺は内心胸をなでおろしていた。

けど――その数日後。

「……おい、茉菜。俺になんか言うことないか」

「愛してる♡」

「違ぇよ！　そんなんじゃねえ！」

「んもう、にーにったら～。ほしがりさん」

「うるせえ！　そうじゃねえって言ってんだろ！」

立場逆転。ソファに寝転ぶをしている。

「えー。何？　全然わかんないんだけどー？　何でキレてんの、にーにに」

「てめぇ俺のアイス食ったろ。一個一〇〇円の。きっちり一個食ったろ」

「名前書いてないからわかんなかったー」

「我が家の冷蔵庫は、名前がこいつ、絶対わかってやったな？　うシステムじゃねえんだよ」

「プリンの恨み」

「三つ一〇〇円ちょいのプリン一個と、一個一〇〇円のアイスじゃ釣り合わねえだろ！　ふざけんな！　風呂上がりの楽しみ返せ！」

「慰謝料込みだから、まだちょっと足んないかも？」

「悪徳どギャルめ！」

「ギャル関係なくない？」

ふしーふしー、と鼻息を荒くしている俺を見て、茉菜はからりと笑った

「まあまあ、今度あたしがクッキー焼いたげるからさ。それで我慢してよー」

「……わかった。今回はそれで手打ちとさせてもらう」

「ふふふ。にーにっては、おこちゃま」

茉菜のお菓子は結構美味いのでそれでよしとした。